



Data

監督/脚本: レジス・ロワンサム
 出演: ランベール・ウィルソン/オルガ・キュリレンコ/リッカルド・スカマルチョ/シセ・バベット・クヌッセン/エドゥアルド・ノリエガ/アレックス・ロウザー/アンナ・マリア・シュトルム/フレデリック・チョー/マリア・レイチ/マノリス・マヴロマタスキ/サラ・シロドー

■ショートコメント■

◆チラシによると、本作のストーリーは次のとおりだ。

フランスの人里離れた村にある洋館。全世界待望のミステリー小説「ダダリユス」完結編の各国同時発売のため、9人の翻訳家が集められた。外部との接触は一切禁止され、日々原稿を翻訳する。しかしある夜、出版社社長の元に「冒頭10ページを流出させた。500万ユーロ支払わなければ全ページが流出する」という脅迫メールが届く。

◆そして、チラシには載っていないが、パンフレットによると、その各国から集められた9人の翻訳家の名前とキャラは次のとおりだ。



「デダリユスの
翻訳を任されるのは
誇りよ」

【カテリーナ・アニシノバ】

ミステリアスで情熱的。ロシア語翻訳を担当。「デダリユス」のヒロイン・レベッカに危険なほどに感情移入している。



「エリックはただ
用心深いただけだ」

【ダリオ・ファレリ】

イタリア語の翻訳者。少々傲慢で胸っぶしが強いが、権力を前に媚びて恩恵を受けたがる姿勢も見受けられる。



「ブレジャーで
つい飲みすぎちゃう」

【エレース・トゥクセン】

エレガントかつ野心的。家族を養うためにデンマーク語翻訳家になった。いつか小説家になることを熱望している。



「セザレ・レベッカが
溺死したのか
知るのほつらい」

【ハビエル・カサル】

どもり癖があり、大人の体に閉じ込められた子供のようなスペイン語翻訳者。意志が弱く、簡単に人に流されやすい。



「樹木がたい
喪失の悲しさを
描いた物語だ」

【アレックス・グッドマン】

集められた翻訳家の中で最年少。「デダリユス」海賊版の翻訳でファンの間で注目され、公式に英語翻訳者に抜擢される。



「まず最後まで
読んで全体を
理解したい」

【イングリット・コルベル】

ドイツ語の翻訳を担当。柔和な印象をたたえているが、無邪気て不安定な一面も見せる。



「寝込んで金の前に
ひね伏すよ」

【チェン・ヤオ】

中国出身で、パリに20年暮らしている真面目な努力家。濃厚な性格であり、翻訳家たちの盛り上げ役。



「あいつの女なの？
あのサト野郎」

【テルマ・アルヴェス】

短気で言葉遣いの荒いポルトガル語翻訳者。首にピストルの刺青を入れている。共同生活は苦手な様子。



「もはや文学でなく
ただの流行り物だ」

【コンスタンティノス・スクドリノス】

ギリシア語の翻訳を担当。ひとりの仕事を好む。学生を集めるため、大学で「デダリユス」の授業を受け持っていた。

◆他方、「デダリユス」を取り巻く人々は次の3人だ。

「デダリユス」を取りまく人々

アングストローム出版



【ローズマリー・ウエクス】

エリックの個人秘書。文学を愛し、アングストローム出版社での仕事を好んでいる。



【エリック・アングストローム】

強欲で無慈悲な出版社社長。「デダリユス」出版権を獲得し、かつてない規模での世界同時出版を計画している。



【オスカル・ブラック？】

世界的大ヒットを記録した小説「デダリユス」の作者。その存在はすべてが謎に包まれている。

原稿の
やりとり

◆本作の原題は『THE TRANSLATORS』だが、邦題は『9人の翻訳家 囚われたベストセラー』。この邦題を見ると、12人の陪審員1人1人のキャラクターが興味深い法廷モノの古典的名作『十二人の怒れる男』(57年)を思い出すが、本作もそれと同じように、9人の翻訳家それぞれのキャラクターをしっかりと確認したい。しかし、『十二人の怒れる男』では、12人の陪審員たちは究極的に被告人が有罪か無罪かの「評決」を下すという自分の目的がハッキリしているのに対し、本作では、9人の翻訳家は本来の仕事は全くできなくなってしまうばかりか、自らの命を危険にさらすヤバイ事態に巻き込まれるので、観客の興味は『十二人の怒れる男』とは全く違うものになっていく。

◆その結果、チラシには「105分」「あなたは「騙され続ける。」「真実は、この中にある。」と書かれているが、その通り、私には本作のミステリーはサッパリわからない。チラシには、さらに「あなたは、この結末を「誤訳」する。」とも書かれているが、私は誤訳することすらできなかった。いくら何でも、こりゃ難しすぎるのでは！

◆レジス・ロワンサム監督の長編第一作となった『タイピスト!』(12年)は、極めて単純でわかりやすいイモ姉ちゃんの成長物語だった(『シネマ31』114頁)が、脚本も自ら書いた本作の難解性と複雑性は群を抜いている。その反省のため(?)か本作のパンフレットには、「物語Ⅰ」として「地下室に囚われた翻訳家たち」を載せている他、わざわざ「物語Ⅱ」として「地獄の終焉と、原稿流出の真相」をまとめたうえ、「真実の相関図」の中で詳しくその種明かし(?)をしている。さらに、本作は後半からクライマックスにかけては、チラリチラリとその種明かし(?)を観客にも見せてくれるので、前半から後半までそのスピーディな展開についていけず、全く何の話しかわからなかった私のような観客は、それをしっかりと確認したい。

しかし、ここまで観客にサッパリわからないミステリーをスクリーン上で展開して一体何の意味があるの?私には、そんな疑問が大きく広がったが・・・。

2020(令和2)年2月7日記